大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会
蓬　莱　む　し　の　会
第 27 号　2026.6.10

麝香揚羽天国計画『お家でジャコウアゲハ』2026 その後

大友　正生

昨年本誌 15 号と 19 号でジャコウアゲハの屋外飼育の記録を掲載してきた。毎月 20 日頃に羽化しており、4 月から 9 月まで 6 回発生している。昔の図鑑やインターネットによると年 3～4 回発生していると記述があり、発生回数が多くなってきている。温暖化による影響かもしれない。カラスアゲハでは不整休眠が観察されているが（橋本 2026, やどりが)、個体を隔離飼育していないので食草を食べつくした場合休眠したかどうかは不明である。

今年の発生の初見は 4 月 15 日であった（図 1)。残念なことに羽化不全に終わった。4 月 19 日には産卵を確認した（図 2）（図 3)。5 月 2 日には別の個体が産卵しており（図 4)、第 1 化の発生に約 2 週間の時間差が生じている。このことが発生回数を複雑にしていないことを望む次第である。

4 月に入ると、まだウマノスズクサの芽が出ないかと気をもみ、茎の長さが約 5 ㎝になるとオスが羽化する。茎から葉が展開するとメスが羽化する。ジャコウアゲハとウマノスズクサの関係は、たかが 2～3 年見ただけの人がとやかく言うことではないかもしれないが、その結び付きの強さを感じさせた。

図１　４月 15 日

図２　４月 19 日(1)

図３　４月 19 日(2)

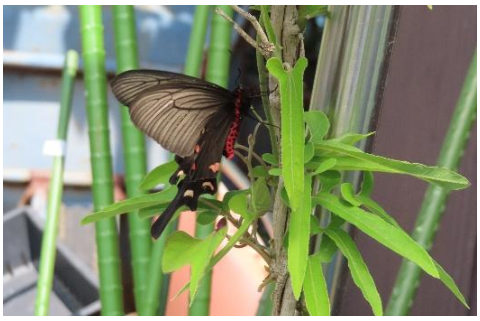

図４　５月２日

私の虫採り物語（6）　かじられたカラスアゲハ －くやしい思い出－

小松 清弘

長年チョウの採集をしていると悔しい思いもいっぱいしてきた。今でも何かの拍子にそんな経験を思い出すと悔しさがよみがえり、ああすればよかったのにと後悔することがある。そんな悔しかった思い出を紹介する。

(1) かじられたカラスアゲハ

小学校５年の夏休み、貴船に採集に連れて行ってもらって吸水に来ていた大きなカラスアゲハのオスを始めて採った。帰宅してすぐに展翅をした。あまりにも大きくて展翅版から翅が出てしまうほどだった。机の上に置き、寝る前にもう一度眺めて寝た。

翌朝、目を覚ましてすぐに展翅版を見ると、なんと頭から背中にかけてゴキブリにかじられていた。その時の悔しさと落胆と後悔は今でも時々思い出して胸が熱くなる。

かじられたカラスアゲハは標本箱に残しておいた。

図１　カラスアゲハ夏型♂

(2) 幼虫に食べられた蛹

早春にスギタニルリシジミを採りに行った時に佐々里峠でヒサマツミドリシジミの採卵をしていた人に会った。その人に採卵の方法を教えてもらって初めて１卵採集することができた。

飼育を始めるとすぐにふ化して順調に育っていった。ちょうどその時偶然にミズイロオナガシジミの小さな幼虫が手に入り同じ容器で飼うことにした。

やがてヒサマツミドリシジミは終齢になり無事に蛹化した。完品のヒサマツミドリシジミが手に入ると期待が大きく膨らんだ。ところが次の日に蛹の様子を見てみると蛹がない。蛹化した場所をよく見ると蛹の下の殻の部分がわずかに残っている。何とミズイロオナガシジミの幼虫が食べてしまったのである。確かにこの仲間には共食いをする種類があることは知っていた。でもまさかミズイロオナガシジミにそんな習性があるとは。失望と後悔だけが残りました。憎っくきミズイロオナガシジミは八つ裂きにしようかと思ったがそのまま育てて標本にした。

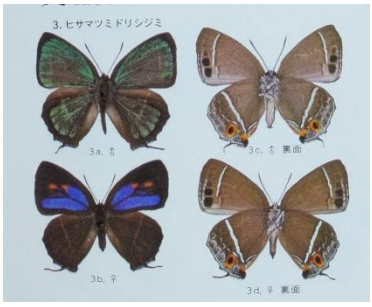

図２　ヒサマツミドリシジミ

(3) 逃したフタオチョウ

初めて沖縄本島へ採集旅行に行った時のことである。復帰後２年の沖縄はまだアメリカの統治の影響が色濃く残り車も右側通行で、バス停で待っていてもいつまでもバスが来ないと思ったら逆方向行のバス停だったなどという失敗もした。那覇周辺での採集を終えて名護に移動し本部半島で採集した。伊豆味のコノハチョウを始め八重山のチョウたちの採集を楽しんだ。

図３　フタオチョウ

その時に会った蝶屋さんから名護城跡でフタオチョウが採れるという情報をもらった。採集方法も教えてもらった。城跡に続く階段を上りきり鳥居をくぐると神木の大きなガジュマルがあり、その梢に持ってきた泡盛を吹きかけて待っているとどこからともなくフタオチョウが飛んできて止まるとのことであった。

それからは毎朝採集に出かける前と帰ってきたときに必ず名護城跡に寄ることにした。次の日の採集帰りに寄ったときのことである。神木に泡盛を吹きかけてしばらく待っていると突然にフタオチョウがやってきた。何度か旋回して泡盛を吹きかけたところに止まった。すかさず兄が網を振った。きれいな個体だった。その日はもうほかの個体は来なかった。

翌朝また狙ってみた。すると前回と同じようにフタオチョウがどこからかやってきて神木に止まった。今度は私の番だ。慎重に網を近づけて一振り。確かな手ごたえ。地面に網を伏せる。フタオチョウが網の中でバタバタしている。網に近づいて取り込もうとしたその時、伏せていた網と地面のわずかな隙間から抜け出して飛び去ってしまった。あっという間に青い空に消えていったフタオチョウを唖然として見つめるだけの自分がいた。

それからも滞在中に城跡に行ったが二度とフタオチョウは現れてくれなかった。何としても採りたいと思っていたが､その後に天然記念物に指定されてそれもかなわなくなった。

ところが近年なぜか奄美大島で発生して採れるようになった。何とか発生が続いているうちの奄美に行って、今度こそフタオチョウを採ってやろうと思っている。

（3 枚の図版はいずれも原色日本蝶類図鑑（保育社）による）

大原　いのちの季（とき）　水無月
マタタビ

マタタビ全体

白くなった葉

林のそばを通ると緑の中に白いものが見られます。以前にはなかったのにとよく見ると葉が白くなっています。これはマタタビの木です。

マタタビは北海道から九州にかけて見られる落葉つる性の木です。花が咲く季節になると枝先の葉の一部が白くなります。葉全体が白くなったものも見られます。

白くなるのは葉の表面に空気の層ができるためで緑の葉が白く変色したわけではありません。葉の裏は緑色ですし、葉の表面を押すと緑色になります。ちょうど花が咲く時期に合わせて白くなり花が咲き終わると元の緑色に戻ります。そのことから白くなるのは花が咲いていることを受粉に来る虫に教えるためではないかと考えられています。

マタタビといえばネコが大好きで葉や小枝、実などに体をすりつけたりなめたりして地面に転がり恍惚状態になることもあります。「ねこにまたたび」ということわざもあります。ライオンやトラにも効果があるようです。

秋には２㎝ほどのフットボールのような形の実をつけます。秋が深くなると黄緑から橙色に変わり生で食べたり果実酒したりできます。　実が大きくなる途中で虫が入りでこぼこになってしまったものは漢方薬の生薬に使われます。（文　小松清弘　写真　的場亮一）

オオサンショウウオの話

藤野 適宏

1. はじめに

2026 年 4 月 16 日、奥谷功さんが LINE で、「今日、高 1 の孫が鴨川三条の河原でオオサンショウウオを見つけたと、LINE してきました！」と、写真とともに送っていただいた。オオサンショウウオは国の特別天然記念物で、絶滅危惧Ⅱ類（環境省）に指定されている。夜行性というが、白昼、平たんな浅瀬をゆうゆうと歩いている写真であった（**図 1**）。大いに感動するとともに、私のこれまでのオオサンショウウオにまつわる思い出がよみがえってきたので紹介する。

図 1　鴨川の浅瀬を歩くオオサンショウウオ（奥谷功氏提供）

2. 幼稚園のハンザキ

私が通っていた幼稚園に小さな池があって、その中にハンザキがいるという話が言い伝えとしてあった。ハンザキはオオサンショウウオの別称で、半分に裂いても死なないことに由来するというが、疑わしい話である。それはともかく、幼稚園のハンザキは単に噂ではなく、先日池ざらいをしたときに出てきたという。それをどうしたのかと聞くと元に戻したという話で、見ることができなかったことをたいそう残念に思ったのを憶えている。今となっては誰に聞いたかも覚えておらず、おぼろげな話である。妖怪話の一種として存在していたのかもしれない。

3. 花背のアンコ

私が花背の中学校へ赴任したのは 1976 年 4 月であった。校区は桂川の上流（上桂川）にあって、アユ漁が盛んであった。おもな漁法は友釣り、素掛け、刺し網であり、このうち素掛け漁は先端に釣り針を付けた 1m 足らずの細竿を持って水中に潜り、直接アユを引っ掛けて捕るという素朴かつ高度な技術を要する漁法で、私は一度体験してからは決して二度と行おうとは思わなかった。しかし地域には達人が何人もいて、漁の解禁ともなれば、それはもう川は“河童天国”と化した。そして誰もがしょっちゅうアンコ（オオサンショウウオのこと）に出会うと言った。上桂川では決して珍しい存在ではなかったようだ。そればかりか淡白だが美味であるなどという話も聞いた。

各家庭の養魚用の水槽にはアンコが潜んでいるのを何度か見た。その中でも A さんは熱心な飼育者であった。エサは小魚を時々入れるという。アンコを捕まえるたびにその水槽に入れるのだが、気付けばいつも 1 頭になっているという話を聞いて、オオサンショウウオの食性の一端を知った。

花背の学校に赴任中、日ごろは教員住宅で起居した。炊事できるひと通りの道具が備え付けられていたが、水道水には難儀した。晴れた日はよいのだが、ひとたび雨が降ると水

道水が茶色く濁る。住人同士、蛇口をひねるとコーヒーが出てくると冗談を言っていたが、蛇口から生きたサンショウウオの幼生が這い出てきたときは驚いた。

あるとき校長先生（地元住民でもある）に浄化水槽の掃除に誘っていただいた。数百 m 山道を入ったところにあった水源は、1m 四方のコンクリート桝に夏ミカン大の石が投入されていただけであった。なるほどこれでは雨が降るとコーヒー色になるし、サンショウウオが出てくると納得できた。このサンショウウオの幼生はオオサンショウウオだったのか、あるいは他のサンショウウオだったのであろうか。

この章に花背の写真を 1 枚挿入したいと思って探してみて、何年か前に突如終活を思い立ち、この頃の写真はすべて廃棄したことを思い出した。“人間、目の黒いうちは終活などしてはいけない”と悟った。因みにうちの嫁さんは終活やそのたぐいの番組の大ファンで、自らも身ぎれいに生きることをモットーとしている。

4. 鴨川下流のオオサンショウウオ

これは伏見区の中学校に勤めていた時の話である。放課後の学校に一本の電話がかかってきた。生徒からで鴨川でオオサンショウウオを見つけたという。電話は理科教員の私に繋がり、とりあえず行ってみた。私も驚く大きさだったので新聞社に連絡すると、現地に取材に来てくれた。

図 2 が翌日の朝刊に載った記事である。今見直してみるといささか恥ずかしい一文があって、“このあたりでは桂川水系しか生息せず、・・・”とある。当時私はそのように理解していたということなのだが、次の章にあるように賀茂川にも生息していたわけである。

このオオサンショウウオは、後日、新聞記事にあるように花背の上桂川へ放した。今から思えばこれもとんでもなく間違った行為であると大いに恥じている。

オオサンショウウオも遠出楽しむ？

伏見の鴨川で発見 連休明けには桂川へ

鴨川にはいないとされる特別天然記念物・オオサンショウウオが二日午後、京都市伏見区竹田の竹田橋下流約四百メートルの水中で見つかった。一体、どこからか、と、発見した近くの中学生や親子の先生らは、思わぬ迷子に思案顔。

このオオサンショウウオは体長一〇二センチ、重さ八キロ。同区、藤森中学二年但馬大助君ら六人がバスケットボール部の帰りに、ボールを拾いに行ったところ、堰（せき）近くの水の下でうろうろしているのを見つけた。

但馬君らの連絡で駆けつけた同中理科担当の藤野達宏教諭は「この辺りでは桂川水系にしか生息せず、市内の鴨川にはいないはず。どこから流れ、間違って鴨川に迷ってきたとしか考えられない」と推定。しかも見つかった所が、川幅六十メートル以上で、速い流れだけに、驚きながらも「この川に捉えるのはかわいそうだ」と手をつけられず、オオサンショウウオがすむ河川とはほど遠い場所。

そこで、近くの市立伏見中学センターに保護してもらう。

迷惑顔は、同センター職員の手を経て長岡京市内の桂川上流に放されるという。

迷子？のオオサンショウウオと、発見した藤森中学バスケットボール部員（鴨川・竹田橋下流）

図 2　鴨川で見つかったオオサンショウウオ
（京都新聞）

5. 賀茂川のチュウゴクオオサンショウウオ

賀茂川は鴨川の出町柳以北の呼び名である。ここのオオサンショウウオのほとんどはチュウゴクオオサンショウウオかそれとの雑種であるという。ウィキペディアには「賀茂川では在来種は絶滅した可能性があり、・・・チュウゴクオオサンショウウオは食用として中国から持ち込まれた」とある。チュウゴクオオサンショウウオの増加とオオサンショウウオとの交雑を防ぐために、2024 年に特定外来生物に指定されたという。**図 1** や**図 2** のオオサンショウウオも日本固有種ではないのかもしれない。

姫島訪問記

藤野　適宏

姫島は大分県国東半島の沖合に浮かぶ東西約 7 km南北約 4 kmの風光明媚な島である（図 1）。この島の北部「みつけ海岸」に 5 月、浜に自生するスナビキソウに大量のアサギマダラが飛来することは有名で、島の名所になっている。2026 年 5 月 26 日、この島を訪れる機会を得た。

図 1　フェリーから見た姫島：右が島最高峰の矢筈岳 266m。左の窪みに集落が集中している。

島のスナビキソウやアサギマダラの保全を一手に引き受けているのは現地の「アサギマダラを守る会」である。事前に連絡して、その代表の大海範男さんにお会いすることができ、島を案内していただくとともに、いろいろなお話しを聞くことができた（図 2）。

図 2　大海範男さん（左）と筆者、於.みつけ海岸

図 3 は大海さんに提供いただいた、みつけ海岸のスナビキソウにアサギマダラが飛来・乱舞する様子である。写真に見える草地がみつけ海岸のスナビキソウ群落のほとんどで、この狭い面積に飛来するアサギマダラの数は圧巻である。観光客用に整備されていて、マーキングは禁止である。

図 3　みつけ海岸のアサギマダラ

あいにく当日は強風でアサギマダラの飛来は少なかった。代わりにというわけではないが、大海さんにご自宅の庭を案内していただいた。ここには大海さんの長年の努力で多くの吸蜜植物（スナビキソウ、スイゼンジナ、コバノフジバカマ、シマフジバカマ、ワスレナグサなど）と食草のキジョランが植えられて、中庭なので風も弱く圧倒的なアサギマダラに出会えることができて、しばし時間が経つのを忘れて舞い飛ぶ姿を楽しんだ（図 4）。

図 4　大海宅のアサギマダラ

図 5　秋の休息地のコバノフジバカマ

島の中部にある秋のアサギマダラ休息地にも案内していただいた（図 5）。因みに、みつけ海岸は春の休息地という位置づけである。約 500 ㎡の空き地にコバノフジバカマが植えられており、私たちも苦慮している白絹病対策をお聞きしたりして、短時間であったが友好を温めることができ、有益なひとときを過ごすことができて、大海さんに大いに感謝する次第である。

＜5 月おもな活動の報告＞

◆5 月 6 日（水　振替休日）　10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
〇参加者　小松、藤野、塩尻、木村、的場、大友、奥谷、計７名
〇活動内容
（午前）網室
・会議　本日の活動内容
・活動　①幼虫観察　②防草シートの設置　③エノキの苗の差し芽　④網室内外の除草
（午後）文化センター
・会議　特別展示、ワークショップについて　（別紙打合せ資料、資料参照）
・ワークショップ資料についての説明
・8 テーマ；8 人で分担してマニュアル、材料を準備する――分担を決定
・各テーマそれぞれ 30 セット準備する

◆5 月 8 日（金）10:00～13:25　（報告者：大友）
〇参加者　大友、小松、的場、村上　計　4 名
〇活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆5 月 13 日（水）10:00～、13:30～、15:00～　（報告者：奥谷）
〇参加者　小松、藤野、塩尻、木村、大友、村上、奥谷、計７名
〇活動内容
（午前）網室
・会議　①本日の活動内容　②ＮＨＫより取材の依頼あり
③セブンイレブン助成金報告－領収書に明細を記入する
④明日、トンボ、蝶の調査実施－大原百井方面
・活動　①ルートセンサス　②幼虫観察　③除草
④文化Ｃからのフジバカマの苗の差し芽
（午後その 1）文化センター
・会議　①放蝶会について－実施計画、役割分担、ノート、ポスター（別紙資料参照）
参加対象－大原学院児童、外には案内しない、外からの参加者は学院で集約
ホームページには案内しない
②ワークショップについて－物品購入、担当者
（午後その 2）大原学院　小松、藤野、奥谷、参加
・学院との打合せ
①放蝶会について　②特別展示、ワークショップについて

◆5 月 20 日（水）10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
〇参加者　小松、藤野、木村、塩尻、的場、大友、奥谷、計７名
〇活動内容
（午前）網室、戸寺
・会議　①本日の活動内容
②セブンイレブン助成金報告－返金精算後に２６年度予算配分される
③ＮＨＫディレクター二階堂さんの紹介と取材依頼
・活動　①幼虫管理－網室外のエノキにつけた袋の交換　②フジバカマ畑の除草
③戸寺フジバカマ畑の除草　④二階堂さんからの取材対応
（午後）文化センター
・会議　①セブンイレブン助成金－HP や印刷物等にロゴを入れる。購入物品について
②特別展、ワークショップについて
・2025 年度の大原、ＢＶルートセンサス報告書作成計画（別紙参照）
・特別展のポスター、はがき、チラシについて

・特別展の標本、目録リストの集積について
・作業　セブンイレブン助成金購入物品の確認と写真撮影
・銀行へ送金作業（木村）

◆5 月 25 日（月）9:40～13:00　（報告者：大友）
〇参加者　大友、小松、村上　計　3 名
〇活動内容：びわ湖バレイルートセンサス

◆5 月 27 日（水）10:00～、13:30～　（報告者：奥谷）
〇参加者　小松、木村、大友、村上、奥谷、計 5 名
〇活動内容
（午前）網室
・会議　①本日の活動内容　②セブンイレブン助成金報告書受理－連絡あれば送金される
③ホタルの調査について　④生物多様性センター友の会シンポジウムの案内
・作業　①ルートセンサス
②幼虫と蛹の管理
網室外のエノキに掛けた袋内の蛹を第 2 網室に移動し、ロープに固定
袋についた蛹は袋のまま第 1 網室内のロープに固定（蛹；13 匹、前蛹；3 匹）
幼虫は別の枝に移動し袋掛け
（午後）文化センター
・会議　特別展示、ワークショップについて
・作業　特別展示用標本の確認、ワークショップ用物品の点検

【あとがき】
6 月 4 日に近畿地方が梅雨入りした。これは平年より 2 日早く、昨年の 5 月 17 日と比べると遅い梅雨入りだという。一方で飼育網室での今年のオオムラサキの蛹化の初見日は 5 月 27 日で、昨年より 7 日遅い。2018 年からの記録に目をやると、オオムラサキにとって梅雨の季節は、蛹化・羽化の季節である。6 月 20 日に放蝶会開催の予定である。梅雨のさなかにもかかわらず、毎年の放蝶会が雨で中止になったことはない。今年も恙なく開催できて、大空へ国蝶が力強く飛び立ってくれることを願っている。（藤野）

＝　目　次　＝

麝香揚羽天国計画『お家でジャコウアゲハ』2026 その後 …… 1
私の虫採り物語（6）　かじられたカラスアゲハ -くやしい思い出- …… 2
大原　いのちの季（とき）　水無月　マタタビ …… 3
オオサンショウウオの話 …… 4
姫島訪問記 …… 6
5 月おもな活動の報告 …… 7
あとがき、目次 …… 8

発行　大原のオオムラサキを守る会・蓬莱むしの会　2026 年 6 月 10 日　第 27 号
ＨＰ　大原のオオムラサキを守る会 https://ohara-omurasaki.com/
大原のオオムラサキを守る会代表　〒606-0044　京都市左京区上高野仲町 54　小松清弘
蓬莱むしの会代表　〒520-0105　大津市下坂本 1-40-16　大友正生
編集　〒611-0011　宇治市五ケ庄西川原 21-151　藤野適宏